様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１２２３８

研究課題名（和文）先駆的な訪問看護を実践する看護師の手法の可視化

研究課題名（英文）Visualizing the methods of nurses practicing pioneering home-visit nursing

研究代表者
木全　真理（Kimata, Mari）

東京大学・高齢社会総合研究機構・特任助教

研究者番号：００５５３５７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、訪問看護を提供する看護師が、どのように法制度にない看護ニーズを把握し、そのニーズに対応する実践をして、社会課題の解決に結び付けていくのかを可視化することであった。そのため、全国の訪問看護事業所への質問紙調査による実態把握と看護師への面接調査で語られた経験から、退院や受診の支援による医療への円滑なアクセス、就学や介護福祉サービス利用のための社会生活の成立、旅行などの生活の質向上のため、神経難病などの疾患で医療処置管理の必要な訪問看護の利用者に対して看護が実践されていた。その手法は、居宅外で発生するリスク対策や実践の効果を予測する熟練した看護実践能力や技能が求められていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
訪問看護事業所による介護保険や医療保険の法制度にない看護実践は、在宅療養者に円滑な医療の提供をし、社会参加の実現をするなど、実社会の課題を解決してきた。しかし、その実践の手法は、十分に明らかにされていない。そこで、本研究では、訪問看護事業所の看護師による、法制度にない、いわゆる先駆性のある看護の実践方法を整理し、その実践に必要となる技能を示した。また、その技能は、これまでの看護師の経験による予測やノウハウなどによって潜在化したニーズを掘り起こすエキスパートレベルのため、法制度にない看護実践の実績のある事業所などの環境も必要となることが示された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to visualize how nurses providing home-visit nursing care identify and address nursing needs not covered by the legal system, to help resolve various social issues. We conducted a questionnaire survey of large-scale home-visit nursing agencies nationwide as well as interviews with nurses. The study found that the nurses provided medical and nursing care for patients with diseases such as neurological intractable conditions that require medical management. This was to facilitate smooth access to medical care through support for hospital discharge and medical examinations, to establish social life for school attendance and use of long-term care and welfare services, and to improve their quality of life, such as travel. The method required nursing skills and competence to predict the effects of risk measures and practices that would occur outside the home.

研究分野：在宅看護

キーワード：訪問看護　法制度

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本では、2013 年に 65 歳以上の人口は総人口に占める割合が 25%を超え、超高齢社会に突入した。今後も特に、高齢化が都市部（3 大都市圏）で急速に進み、人口総数に占める 75 歳以上の後期高齢者の割合が急増する。このように変化していく社会に向けて、今、都市政策をはじめとする様々な政策を見直し、総合的に展開させていくことが求められている。その一つとして、最期まで住み慣れた家や地域で住み続けることができるよう、地域包括ケアシステムの構築が推進されている。これから迎える超高齢社会は、世界でも経験のない新たな社会の課題であり、その課題を解決していくためには、これまで社会の課題を解決してきた実践力や技能も必要となると考えられる。

これまで高齢化の進展とともに、訪問看護事業所は在宅医療や介護、そして介護予防を中心とした看護ニーズに対応するため、健康保険法あるいは介護保険法（法制度）による看護サービスを提供する役割を発揮してきた。訪問看護事業所では、法制度にない看護ニーズも掘り起こし、そのニーズに対応する看護を実践してきた看護師もいる。その実践は、難病や終末期などにある在宅療養者の退院や受診、就学や施設利用、旅行などを実現させ、病状が不安定な時期や家族が不在でも安心して自宅で過ごすことや、家族内の役割を果たすなどのニーズに対応してきた。そのためには、社会の課題を汲み取り、実践に組み換えていく、先駆性のある看護を提供してきた看護師の手法が必要となる。しかし、先駆性のある訪問看護を実践する看護師が、どのように法制度にない看護ニーズを把握し、そのニーズに対応する実践をし、社会の課題の解決に結び付けていくのか、その手法は十分に整理されていない。

２．研究の目的

本研究では、先駆性のある訪問看護を実践する看護師が、どのように法制度にない看護ニーズを把握して、そのニーズに対応する実践をして、社会の課題の解決に結び付けていくのかを可視化することを目的とする。

３．研究の方法

本研究の目的を達成するために、次の手順で進めた。

1）法制度にない訪問看護を実践する看護師の選定

法制度にない訪問看護に関する国内外の先行研究や事例を収集して検討した結果、訪問看護の利用者への居宅外での看護実践の把握に焦点を当てて、研究フィールドの選定や質問項目の選定を含む調査の設計を行った。調査を実施する前には、法制度にない看護を実践した実績のある訪問看護事業所の管理者（看護師）2 名に、作成した調査項目に対する意見を聴取し、調査内容は回答可能であることを確認し、調査票の項目を設定した。また、本研究では、法制度内にない訪問看護の実践は、訪問看護事業所が認めた健康保険法あるいは介護保険法による報酬以外の活動を、利用者や訪問看護事業所等の経費負担によって、看護師が居宅外で提供する看護実践を示すこととした。

法制度にない訪問看護の実態は、非常に少なく、また規模の大きい訪問看護事業所での実績がある傾向がある。よって、居宅外の訪問看護の実績を把握するためには、できるだけ規模の大きい事業所を抽出して、その事業所の看護師を対象にすることとした。そこで、全国の訪問看護事業所約 8500 カ所のうち規模の大きい訪問看護事業所の管理者（看護師）に、事業所の体制と居宅外での訪問看護の実践状況に関する自記式の質問紙による郵送調査を実施した。調査への回答結果より、看護師が所属する訪問看護事業所での実績と面接調査への了解を得られた看護

師を選定した。

2）訪問看護師が実践する法制度にない看護実践の手法の把握

質問紙調査の回答より居宅外で訪問看護のニーズや実践の概要を把握するための分析と、半構成化した質問紙による面接調査を実施した。

質問紙調査では、訪問看護事業所が居宅外で実践した内容、事業所の体制、実践された利用者の状況に関する特徴を把握するために、訪問看護事業所の体制と居宅外における訪問看護の実践状況に関する項目の記述統計量の算出や、居宅外における訪問看護の実践の有無による各項目の比較検討等を行った。

面接調査では、居宅外での訪問看護を実践する過程において、看護師自身から語られる経験から、看護師に内在する実践の意図、予測、意義、成果、そしてノウハウなどの側面を捉えることができる調査票を設計し、それぞれの内容を具体化した。また、居宅外での看護実践は、能力や技能を高い段階で求められ、その実践のための臨床判断も熟練を要することが考えられた。そこで、看護の実践レベルの特性が示されている、ベナーの看護理論も考慮した。

４．研究成果

本研究では、全国の訪問看護事業所への質問紙調査による実態把握と、訪問看護事業所に所属する看護師への面接調査によって語られた経験から、先駆性のある訪問看護を実践する看護師の法制度にない看護ニーズの把握と、そのニーズに対応する実践の手法を可視化した。

全国の比較的規模の大きい（看護職員の常勤換算数 5 名以上等）訪問看護事業所 1773 カ所の管理者（看護師）を対象とした居宅外での看護実践の実態に関する質問紙調査より、居宅外の訪問看護の実践があった事業所 127 カ所から居宅外の訪問看護の実践は 172 件と、居宅外での訪問看護の実践のあった利用者 167 名のデータを得ることができた。その主な実践内容は、退院時の病院と自宅の移動や受診の同行などの退院や受診の支援（108 件）、通所施設や就学先、施設等への訪問（56 件）、旅行への同行等の外出の支援であった。その実践をされた利用者の年齢は 71～80 歳（37 名）が最も多かったが、最低年齢は 1 歳未満、最高年齢は 99 歳と年齢の幅があった。利用者が在宅療養を続けている原因の病名は、神経難病（43 名）が最も多く、次いで脳血管疾患（38 名）であった。利用者に居宅外で提供された看護は、家族支援（66 名）が最も多く、次いで看護師による他サービスの連絡調整（57 名）であった。また、吸引・吸入（40 名）、服薬援助・管理（27 名）、人工呼吸器の管理（25 名）等の医療処置管理もあった。

特に、居宅外の訪問看護を実践する前に実践の設定をしていた事業所は 87%（111 カ所）、実践をしていた事業所群と実践をしていない事業所群と比較すると、実践している事業所群の方が有意に実践を設定していた（$p<0.001$）。面接調査からは、居宅外で訪問看護を実践していた訪問看護事業所に所属する看護師 9 名から、実践前に事業所内の複数の看護師とともに、利用者や家族に看護師が実践をする必要性、信頼関係の構築された利用者や家族への実践の提案、実践による効果の予測、居宅外で起こりうる事故や急変等へのリスクの予防や対応策等の検討を重ねた上で実践していた経験が語られた。

訪問看護事業所は居宅外で、退院や受診の支援による医療への円滑なアクセス、就学や介護福祉サービス利用のための社会生活の成立、旅行などの生活の質向上のため、神経難病などの疾患で在宅療養をしており、医療処置管理の必要な訪問看護の利用者に対して、家族や多職種とともに看護が実践されていた。その実践の手法は、居宅外で看護が実践される前に居宅外で発生するリスク対策や実践による効果の予測などの熟練した看護実践能力や技能を求められていた。

＜引用文献＞

・BENNER, P. E.; TANNER, Christin A.; CHESLA, Catherine A. 早野 ZITO 真佐子（訳），ベナー 看護実践における専門性：達人になるための思考と行動．1996．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 木全真理	４．巻 37
２．論文標題 保険制度外の訪問看護の実態に関する調査研究	５．発行年 2017年
３．雑誌名 日本看護科学会誌	６．最初と最後の頁 329-335
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.5630/jans.37.329	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 Kimata M, Matsumoto Y.
２．発表標題 Characteristics of home visiting nurses in different types of multidisciplinary collaboration in the community.
３．学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 木全真理
２．発表標題 居宅外で実践された訪問看護の利用者と家族のニーズの検討
３．学会等名 第39回日本看護科学学会学術会
４．発表年 2019年

１．発表者名 木全真理，原口道子，板垣ゆみ，中山優季
２．発表標題 神経難病の在宅療養者への居宅外における訪問看護実践の関連要因
３．学会等名 第24回 日本難病看護学会学術大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 木全真理，松本佳子
２．発表標題 地域内の多職種協働に参加する訪問看護ステーション管理者の属性
３．学会等名 第1回 日本在宅医療連合学会大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 木全真理
２．発表標題 訪問看護師が居宅外で実践する保険制度外の訪問看護の実態
３．学会等名 第38回日本看護科学学会学術集会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kimata M
２．発表標題 Role Awareness of Home-Visit Nurses in Multidisciplinary Collaboration
３．学会等名 The 21st International Association of Gerontology and Geriatrics, San Francisco, California, US（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 木全真理
２．発表標題 訪問看護ステーション管理者の多職種協働への参加理由と管理者の特徴
３．学会等名 第37回日本看護科学学会学術集会，仙台
４．発表年 2017年

１．発表者名 木全真理
２．発表標題 先駆的な訪問看護の実践に関する特性の検討
３．学会等名 第35回日本看護科学学会学術集会
４．発表年 2016年

１．発表者名 Mari Kimata
２．発表標題 Role Awareness of Home-Visit Nurses in Multidisciplinary Collaboration
３．学会等名 2017 IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考